

宮城県における双子支援の現状

塩野悦子、大沼珠美

宮城大学看護学部

キーワード

双子、地域保健、支援、調査

twins, community health, supports, survey

要 旨

宮城県の双子支援の現状と問題を明らかにするために、質問紙調査を実施した。回答のあった宮城県61市町村と仙台市5区の66ヶ所の母子保健担当保健婦を調査対象とした。全体の8割が双子指導に意識的に関わっていた。双子出生数の多い9ヶ所が双子支援事業を実施しており、それぞれが双子母親の交流会を開催し、母親たちが自主的に運営する自主化群と保健婦が企画する非自主化群とがあった。事業を実施していなかった57ヶ所では個別的な対応がほとんどであったが、その半数が双子支援事業の必要性を感じ、他地域の取り組みに関する情報を参考にしたいとの意見がみられた。

Community Care Support for Twins in Miyagi Prefecture

Etsuko Shiono, Tamami Onuma

Miyagi University School of Nursing

Abstract

We studied the current status of community care support for twins in Miyagi prefecture. 66 public health nurses in charge of maternity care (61 municipal areas of Miyagi prefecture and 5 wards of Sendai city) answered the questionnaires. The 80% of the subjects cared the twins mothers consciously. 9 areas which had high twins birth rate conducted the twins programs as a meeting of twin mothers. There were the voluntary groups which the mothers led and involuntary groups which the public health nurses led. Other 57 areas didn't conduct the twins programs, but considered the each individual case. The half of these areas felt the necessity of the twins programs and wanted to know the information about the other's twins programs.

I. はじめに

今泉¹⁾が人口動態統計を分析をした結果によると、全国の出産千に対する双子の出産率は87年から上がり続け、97年は9.09と最高記録を更新し(86年の1.4倍)、三つ子は横ばいになっているが多胎児の出産はここ10年で増加している。また一卵性に比べ二卵性双子の出産だけが急増していることから(図1参照)、排卵誘発剤の使用や体外受精などの不妊治療が影響していると考えられている。

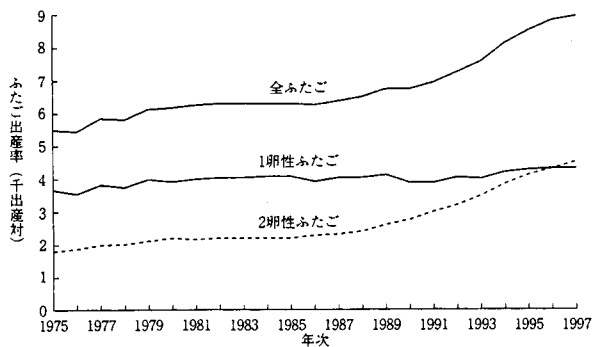


図1 卵生別ふたご出生率の年次推移、1975～1997年(文献:詫摩武俊他:ふたごの研究、p400、ブレーン出版)

いうまでもなく双子の妊娠分娩そしてその育児は心身ともに負担が大きいため、多胎児支援の意識が全国的に高まっている。2000年に厚生労働省は双子の小冊子²⁾を刊行したり、双子育児グループによる支援が行われている地域や医療施設が多くなっている。

宮城県(宮城県市町村と仙台市区を含む)においても双子支援の事業が実施されているところがあり、それぞれが独自に工夫し良い評価を得ているが、互いの情報交換の場がなく、方法を模索しているところも多い。双子支援をしている保健医療者がよりよい支援を行うためにも現状や問題を把握しておくことが必要と考えた。そこで本研究では、宮城県における双子支援の現状と問題を明らかにし、今後の支援の方向性を考察することを目的とした。

II. 研究方法

調査期間は平成12年9月から10月で、宮城県70市町村と仙台市5区の合わせて75ヶ所の母子保健

担当保健婦に、質問紙を郵送にて発送を行った。質問紙作成においては3名の母子保健担当保健婦から双子支援に関する状況や問題などを事前に聞き取って参考にした。質問項目の内容は1)各市区町村の双子出生の動向(平成9年～11年の平均年間双子出生数と双子増加状況に対する保健婦の認識)、2)地域における双子支援に対する認識(①母子保健担当保健婦の双子意識、②双子指導の重点項目、③双子に関する情報源)、3)双子支援実施状況(双子支援事業を行っていた地区を「支援事業実施群」と以後記載する)、4)支援事業実施群の実施内容、5)双子支援への意見の自由記載である。双子意識とは、各市区町村の母子保健担当保健婦の双子指導への意識の程度と定義し、その意識を4段階(とても気にかけている・まあまあ気にかけている・あまり気にかけていない・全く気にかけていない)に分けた質問項目を作成して用いた。また双子指導の重点項目とは、文献等から主なる双子指導で重要な項目を列挙して複数回答とした。分析はSPSS10.0Jにて基本的な統計の処理を行い、自由記載は内容別に分類した。

III. 結 果

質問紙は宮城県61市町村と仙台市5区の66ヶ所の母子保健担当保健婦から回答があり、回答率は88%であった。

1) 宮城県・仙台市の双子出生の動向

(1) 平均年間双子出生数(平成9年～11年)

平成9年から11年までの双子出生数の記載を求めたところ、51ヶ所が回答した(回答率68%)。本調査では、この3年間の出生数の平均を年間双子出生数として算出し、4群に分類して図に示した(図2)。平均年間双子数が0組の群は11ヶ所(21%)、年間1～2組の群は25ヶ所(49%)、年間3～4組の群は6ヶ所(12%)、年間5組以上の群は9ヶ所(18%)であった。年間3～4組の群と5組以上の群に関しては、その市区町村名と組数を示した。(支援事業実施群を黒丸で示している。)

(2) 双子増加状況に対する保健婦の認識

ここ数年で地区内の双子出生数が増えているかの設問に対し、増加していると回答したのは23

% (15名)、増加していないと回答したのは77% (51名)であった。増加している15名の内訳は9名が双子出生数の多い支援事業実施群(仙台市とその近郊地域)で、2名が平均して双子出生のやや多い中規模な市であった。他4名は小規模な町で、その内訳は2名が通常0組だったのが平成11年度に2組あった地域、1名は少しずつ増加している地域、1名は出生数の記載がなかった。

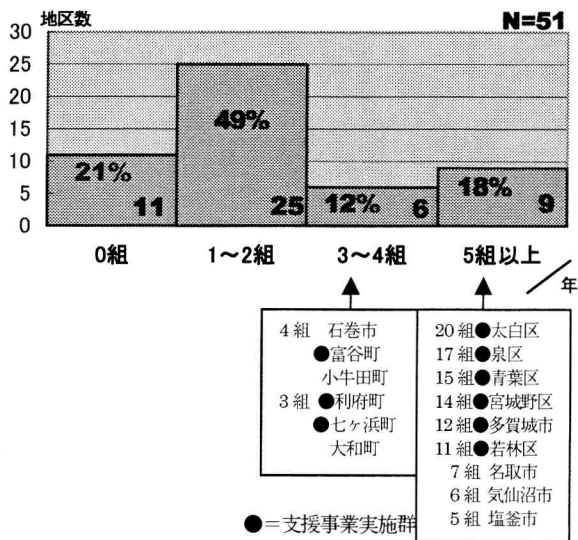


図2 宮城県における平均年間双子出生数の状況 (平成9年~11年)

2) 母子保健担当保健婦の双子指導に関する認識

(1) 母子保健担当保健婦の双子意識

双子指導の際に双子ということでどのくらい特別に気をかけているかの設問に対し、とても気にかけているが18% (12名)、まあまあ気にかけているが65% (43名)、あまり気にかけていないが14% (9名)、全く気にかけていないが3% (2名)であった(図3)。また年間双子出生数との関連を見てみると(図4)、出生数が多い地区ほど双子意識は高い傾向にあるが、とても気にかけているとまあまあ気にかけているをあわせて83%であるため、全体的に地域の保健婦における双子指導への意識は高い傾向にあった。

(2) 双子指導の重点項目

双子指導の際に、どのような点に気を付けているのかの設問(複数回答)に対し、双子の育

児中の精神的状態が52名(79%)、双子育児の家族によるサポート面と双子の育児中の身体的疲労が共に51名(77%)、双子の成長・発達面が45名(68%)であった。双子の妊娠中のハイリスク状況は21名(32%)、双子の授乳については17名(26%)、双子の妊娠の受け入れ状況は13名(20%)、双子の仲間作りは12名(19%)、双子育児の経済的側面は7名(11%)であった(図5)。

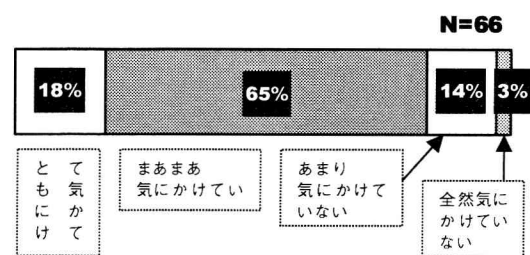


図3 母子保健担当保健婦の双子意識

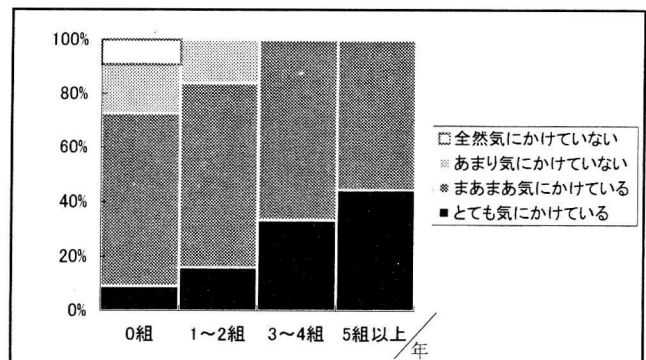


図4 双子意識と平均年間双子出生数

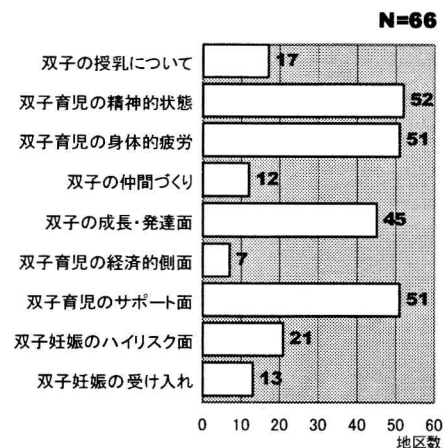


図5 双子指導の重点項目(複数回答)

(3) 双子に関する情報源

双子指導の際の情報源においては、双子母親の経験談（苦労や工夫など）をよく聞いて参考にすると回答があったのは26%、双子に関する情報でも双子に関する本や雑誌を参考にしていると回答があったのは8%であった。無回答が66%で、ほとんどは情報源に関しては回答がなかった。

3) 双子支援事業実施状況

支援事業実施群は9ヶ所（14%）で、仙台市5区と仙台近郊の4市町（多賀城市、富谷町、利府町、七ヶ浜町）であった。非実施群は57ヶ所（86%）であった（図6）。

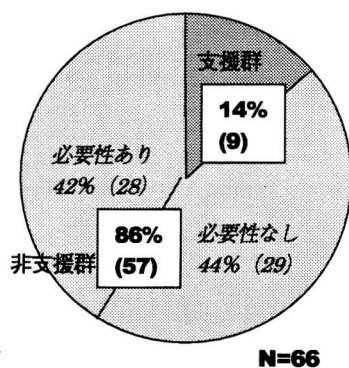


図6 双子支援事業実施群と非実施群

非実施群の中で、支援事業の必要性があると回答したのは28ヶ所（42%）、必要性がないと回答したのは29ヶ所（44%）であった。必要性を感じているが事業としては行っていない状況について、検討中が1ヶ所、他の事業が優先的なのが1ヶ所、情報が少ないが5ヶ所、個別対応が21ヶ所であった。必要性がないと感じている理由としては、個別対応で十分ということであった。

非実施群の対応としては、少人数なので個別に対応している（15ヶ所）との記載が多かった。また郡部では祖父母の支援で充足されているとの意見もあったり（4ヶ所）、ボランティアを活用し、母親の負担を軽減していること（3ヶ所）、先輩双子ママの紹介（1ヶ所）などがあげられた。現状としては、双子が少数のため、事業としては困難であるとの意見であった（8ヶ所）が、他地域の実態や取り組みをぜひとも把握して今後の参考に

したいとの意見（11ヶ所）も自由記載にみられた。また、市町村では少数なので、広域（保健所単位）で双子育児グループを実施することの提案が記載されていた（8ヶ所）。

4) 支援事業実施群（9ヶ所）の実施状況

どの地区も最初は保健婦が双子の仲間づくりを目的に事業を開催しているが、すでに保健婦の手から離れ、母親が運営している自主化群5グループ（泉区、宮城野区2グループ、富谷町、多賀城市年長グループ）と、保健婦が現在も運営している非自主化群6グループ（若林区、太白区、青葉区、利府町、多賀城市年少グループ、七ヶ浜町）に分類できた（表1）。支援事業実施群の中でも、一つの地区に2グループがあるところが存在し、宮城県では全部で11グループの双子育児交流会が運営されていた。

各地区で交流会ができた実施動機は、全対象（9ヶ所）が母親からの要望が出てきたことをあげており、4ヶ所が出生数が増えてきて保健婦の意識が高まってきたことをあげていた。

交流会については、母子手帳交付時、母親学級時、新生児家庭訪問時などに保健婦が情報を提供している。また交流会の内容は、全対象が談話（母親同士が日ごろの悩みや近況を話す）を中心に行っていた。またイベント（季節の行事、子供のあそび、おやつ作り方など）を取り入れているのが8ヶ所、会報（FAX通信、回覧ノートを含む）の発行をしているのが6ヶ所、リサイクルをしているのが6ヶ所であった。また3ヶ所では講話を取り入れていた。

交流会に参加する双子の年齢を多い順に記載してもらった結果、1～3歳が主であった（表1参照）。このことに関連して「双子を育てている方にとって一番情報を必要とするのが、誕生から1歳までころだと思うが、この頃が交流会に来たくても、子供を連れて出かけるのが大変なので気軽に相談できる体制を作りたい」と自由記載に意見が述べられていた。また生まれる前の双子の妊婦にも情報が提供され、妊婦が参加している所もあった。

自主化群の問題点は4つに分類され、①経済面での負担で、少数にもかかわらず会場費がかかる

表1 宮城県の双子支援事業実施群の現況

	地区名	開始→自主化	名称	名称	主な参加年齢 (上位2つ)	備考
自主化群	泉区	平成7年→9年	定期的月2回	ついんず	2歳、3歳	
	宮城野区① ②	平成7年→12年 平成8年→10年	定期的月1回 定期的月1回	ブイブイキッズ そらまめキッズ	3歳、2歳	高砂地区 新田地区
	富谷町	平成10年→10年	不定期年4回	富谷ツインズクラブ	2歳、3歳	保健婦必要時参加
	多賀城市①	平成10年→12年	定期的月1回	リトルツインスターズ	3歳、4歳	年長児(3歳以上)
非自主化群	若林区	平成8年	定期的月1回	ツインズマザー、 この指とーまれっ！	2歳、1歳	自主化へ移行中
	太白区	平成9年	定期的年6回	ジェミニの会	2歳、1歳	自主化へ移行中
	青葉区	平成10年	不定期年4回	双子ちゃん三つ子ちゃんセミナー	1歳、2歳	自主化へ移行中
	多賀城市②	平成10年	定期的月1回	双子の会(プラチナ)	1歳、2歳	年少児(0～3歳)
	利府町	平成11年	定期的年6回	双子の親子のつどい	4歳、0歳	
	七ヶ浜町	平成11年	不定期年4回	双子の会	1歳、0歳	

平成12年10月現在

こと(2ヶ所)、②継続化の問題として、双子育児でもっとも大変な0～3歳くらいまでは参加するが、保育園・幼稚園に入ると、徐々に参加しなくなってくること(2ヶ所)、③参加者が少ないこと(2ヶ所)、そして④託児を利用しないので母親交流がじっくりできないこと(1ヶ所)が記載されていた。

非自主化群の問題点は3つであり、①多数が自主化の問題をあげ、自主活動に向けて中心となる人がなかなか見つからないことであった(4ヶ所)。入園と同時に交流会から卒業していく傾向にあることが大きく影響しているとのことである。また②参加者数が少ないこと(2ヶ所)、③双子に関する情報が少ないこと(2ヶ所)が記載されていた。

4. 考 察

1) 宮城県の双子出生動向からみた支援の現状

宮城県の双子出生率の動向としては、96年(平成8年)が0.80%で全国41位、97年(平成9年)が0.86%で32位、98年(平成10年)が0.90%で27位となり、全国的には上位ではないが、確実に上昇傾向にある³⁾⁴⁾⁵⁾。宮城県では、仙台市とその周

辺の新興住宅地域、および中規模市において双子出生数が多く、特に仙台市とその近郊において双子支援事業として、双子育児交流会が開催されていた。非支援群の中では、双子出生の少ない地域は今後とも個別対応でケアが行き届いていくと考えられるが、双子出生の比較的多い地域においては、今後の検討が期待される場所である。双子支援に関する自由記載においては、双子出生少数の地域においても、他地域での支援体制について参考にしたいという意見が多く見られることから、母子保健担当保健婦が情報を交換しながら、支援のネットワークを広げていくことが今後の課題であると考えられる。

保健婦の双子増加状況に関する認識で増加していると感じている地域において、急に双子数が増えている地域が2ヶ所あった。この点から、双子数が少ない地域においても将来的に対応が迫られる可能性も考えられる。

双子の支援体制を整える必要性としては、同じ仲間(ピアグループ)との交流が育児期の母親たちにとって効果的なものであること⁶⁾、同じ仲間集団での語らいは母親自身のエンパワーメントにつ

ながるということに⁷⁾基づいている。その中でも特に双子の母親たちは自分が一人の妊娠や育児とはちがって特殊で大変であると思っており⁸⁾、双子という共通体験の親が集う意義は深いものとする。少数ではあるが、非実施群の中でも先輩双子ママの紹介などを行っているところもあり、事業にはいさらなくても、この意義を理解して支援に臨むことが重要であると思われる。

日ごろ大変な育児に追われ、情報を得る余裕もなく、外出もなかなか困難な双子の母親たちが同じ経験を共有することにより、育児の活力をえる貴重な場が提供されていくことになると思われる。

2) 地域における双子指導への認識

宮城県における母子担当保健婦のほぼ8割が双子の指導に意識的に関わっており、地域における保健婦の双子支援への理解が得られていたと考えられる。特に双子指導の際には精神的側面やサポートの側面に配慮し、疲労が極度になる双子育児の身体的側面にも高い割合で配慮していた。しかし、双子の受け入れや妊娠中のハイリスク面、など妊娠中の側面については、医療機関に関わっているためか、役割意識の違いが現れているものと考えられる。服部⁹⁾は妊娠期の関わりで地域の保健婦の働きかけの少なさを指摘し、妊娠期からの双子の母親への指導が今後の重要な課題となると述べている。双子の授乳、仲間作り、経済的側面の項目に関して低い値であった点においては、授乳そのものの指導は医療機関に関連することが多く、仲間作りでは双子数が少ないことからのことが伺える。経済的側面においては他県における調査¹⁰⁾と同じであったが、当事者には大きな問題であるとするが行政的な支援にはいたっていない。

また双子に関する情報源としては、双子の母親からの経験談をきいて、双子育児の状況を把握するのみで、あえて双子に関する出版物や雑誌などから情報を得るということは少ないものが現状であると考えられる。情報を得ることは不安を高める側面もあるが、双子の親になっていくことの予期的手段としては必要だろうし、双子の妊娠中は安静が強いられ思うように探しに行くことすらできなかったりするので、支援者ができるだけ情報を得ておき、情報を提供できる準備をしておくこ

とは重要である。最近では本や雑誌の他に、インターネットによる情報が入手力という点で優っており、インターネットの使用状況を把握していくことも必要になっていくと思われる。

双子育児支援においては地域における保健婦の関わり方が非常に大きな意味をなしてくるといわれているが¹¹⁾、医療施設側でも妊娠期から継続して育児期を支援していく体制を整え、地域との連携をさらに深めていくことが重要と思われる。今後は医療施設側からみた双子支援についての現状について調べていく必要があるだろう。

3) 今後の双子支援のあり方について

支援実施群9ヶ所では、特に母親のニーズが高かったことから事業が開始されており、双子の親ならではの悩みや楽しみなどを共感してもらえる場が提供されている。宮城県では行政がこのような取り組みをしているが、参加はあくまでも自主的であることが前提である。双子の育児の特徴では、外出に手間がかかること、一人の体調が悪ければ外出できないことなどにより、交流会に参加することも非常に難しいことである。特に参加年齢に0歳代が少ないのは、そのためであると思われるが、特にこの情報を必要とする年齢層が参加できるような体制を考えていく必要がある。

現在まで様々な双子育児への支援策が練られている。平成12年度より厚生省が双子支援対策として双生児家庭訪問事業を開始した。これは親のリフレッシュ目的でベビーシッター利用料金9000円／年が助成される制度であるが、利用条件に限りがあるので、思うように利用しにくいし、また周知されていない現状である。また尼崎東保健所では平成3年度から全国に先がけて、双子妊婦と就学前の双子の母親と家族を対象に「双子のための育児教室」を開催し¹²⁾、妊娠中からの継続的な関わり方を取り入れて支援にあたっている。また島野¹³⁾は地域子育て支援ネットワークの一環として双子育児自助グループを組み込み、子育て支援コーディネーターとして、民生委員・主任児童委員・ボランティアグループなどの連携を利用している。30年前より活動するツインマザースクラブという全国的な双子支援組織においては、会報での国内外の双子情報の掲載・双子の親による電話相

談（ツインズホットライン）は元より、最近では双子の育児に一段落したシニアグループの先輩双子母親が家庭訪問による支援なども行っている。

双子や多胎児育児では、仲間作りと同時に、身近に気軽に手伝いを求められる体制が支援のポイントであると考えられる。本研究においても幾つかの市町村で育児ボランティアの活用が行われていたが、行政的に多胎児支援としてこのようなシステムがさらに広がるのが有効ではないかと思われる。仙台市においては、平成13年7月より出産の退院後1ヶ月以内にヘルパーを派遣してくれる「産後ヘルプサービス」制度が施行されており、1日1回1～4時間まで、最大10回（多胎児は15回）まで、1時間820円（低所得者は条件によって低額もしくは無料）という制限はあるものの、大いに支援の幅が広がっている。多胎児の配慮も含まれており、大いに活用されることが期待される。

大岸・天羽¹⁴⁾が多胎児育児の調査を行った結果、ほとんどのケースが過労状態であり、支援に必要な内容として、多胎妊娠・出産の説明と不安軽減のカウンセリングの強化、多胎児の母親となる人を対象としたクラスの開催、多胎児のための公的なヘルパー制度の確立、多胎児情報提供の強化を掲げている。今後とも双子や多胎児の支援においては、多くの声を聞いて、より利用されやすい体制に作り上げていくべきであると考ええる。

また、双子育児の母親を支援するにあたって、家庭の中における支援者状況の配慮は必要不可欠である。育児協力者がいるとないでは双子の母親の疲労に有意に差があるという報告¹⁵⁾からも重要であることはいうまでもない。郡部では祖父母の手が得られやすいことは普通の育児でも親にとっては非常に大きな支えだが、双子育児にとってはなおさら良き環境となる。しかし市部では転勤族が多かったり、近隣の付合いが希薄だったり、そのような支援は得られにくいことが多く存在する。その意味でも、大変な時期に行政から支援の手が伸びてきたことは、今後の双子支援にとって正に心強い動きであり、双子教室開催や仲間作り・ボランティアの活用という支援内容を大きく支える体制といえるだろう。

5. ま と め

宮城県の地域における双子支援においては、全体的に保健婦の双子支援への意識が高く、双子出生数の多い地域においては育児交流会を中心とした支援体制が充実しつつあるが、これから支援体制を整えていく地域においては情報が不足していることが問題として考えられた。また支援事業実施群においては少数ならではの運営体制が問題の焦点となっていた。今回明らかになった問題によって、ネットワークを中心としたよりよい地域体制を考えていく示唆が得られた。

多胎児に関するピアグループによる支援は、全国単位（ツインマザースクラブが代表的なもの）、地域単位（保健センター主導のグループや地域の自主グループなど）、病院施設単位（同じ病院で双子を出産した親の自主的グループ）に分けられる。病院施設における双子支援も、妊娠からの継続的な関わりや、授乳指導、育児指導などの点から非常に効果的であると考えられている。今後は病院施設における双子支援への現状を調査する中で、地域との連携などについて考えていきたい。

引用文献

- 1) Imaizumi, Y and Nonaka, K (1997). The twinning rates by zygosity in Japan, *Acta Geneticae Medicae et Gemellologiae* 46 : 9-22.
- 2) 厚生省児童家庭局母子保健課：ふたごの育児－ふたご・みつごの赤ちゃんを育てるために－平成12年3月
- 3) 厚生省児童家庭局母子保健課：母子保健の主なる統計、平成9年度刊行
- 4) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課：母子保健の主なる統計、平成10年度刊行
- 5) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課：母子保健の主なる統計、平成11年度刊行
- 6) 新道幸恵他：育児中の女性のピアサポートに関する研究（第1報）－ピアサポートの形成発展の要件とそのメカニズム－、p142-145、第12回日本助産学会学術集会集録、1998
- 7) 原田紀子：子育てをしている母親のサポートグループを通したエンパワーメント、看護研究、29(6)、1996

- 8) レーネ・ロノウ：ふたごの妊娠・出産・育児、
ピネバル出版、1991
- 9) 服部律子：双子をもつ母親と家族への保健指導
の現状と課題、57(1)、44-49、保健婦雑誌、2001
- 10) 岸利江子他：多胎児家族への保健指導の実態調
査（第1報）－市町村の取り組み－、41(3)、281、
母性衛生、2000
- 11) 早川和生編：双子の母子保健マニュアル、98-99、
医学書院、1993
- 12) 大岸弘子：双子とその母親のケア、43-56、ピネ
バル出版、1993
- 13) 島野由紀子他：多胎児子育て支援事業「ツイン
ズクラブ」育成とわたしたちのまちの子育て支援、
57(1)、50-54、保健婦雑誌、2001
- 14) 大岸弘子、天羽幸子：多胎育児の現状から育児
支援を考える、ツインマザースクラブ会報、148、
10(11)、1996（平成7年度厚生省心身障害者研究
：多胎妊娠の管理およびケアに関する研究）
- 15) 横山美江他：多胎児をもつ母親の心身の疲労と
育児協力状況、81-88、44(2)、日本公衆衛生学会
誌、1997